

大唐三藏物語

上



集英社

伝

上



西域伝——大唐三蔵物語 上巻

一九八七年十二月二〇日 第一刷発行

定価 九八〇円

著者 伴野 朗

装丁者 原田維夫

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―二〇  
郵便番号 一〇〇―

出版部 (03) 33016100  
販売部 (03) 33016171

製作課 (03) 33016680  
印刷所 凸版印刷株式会社

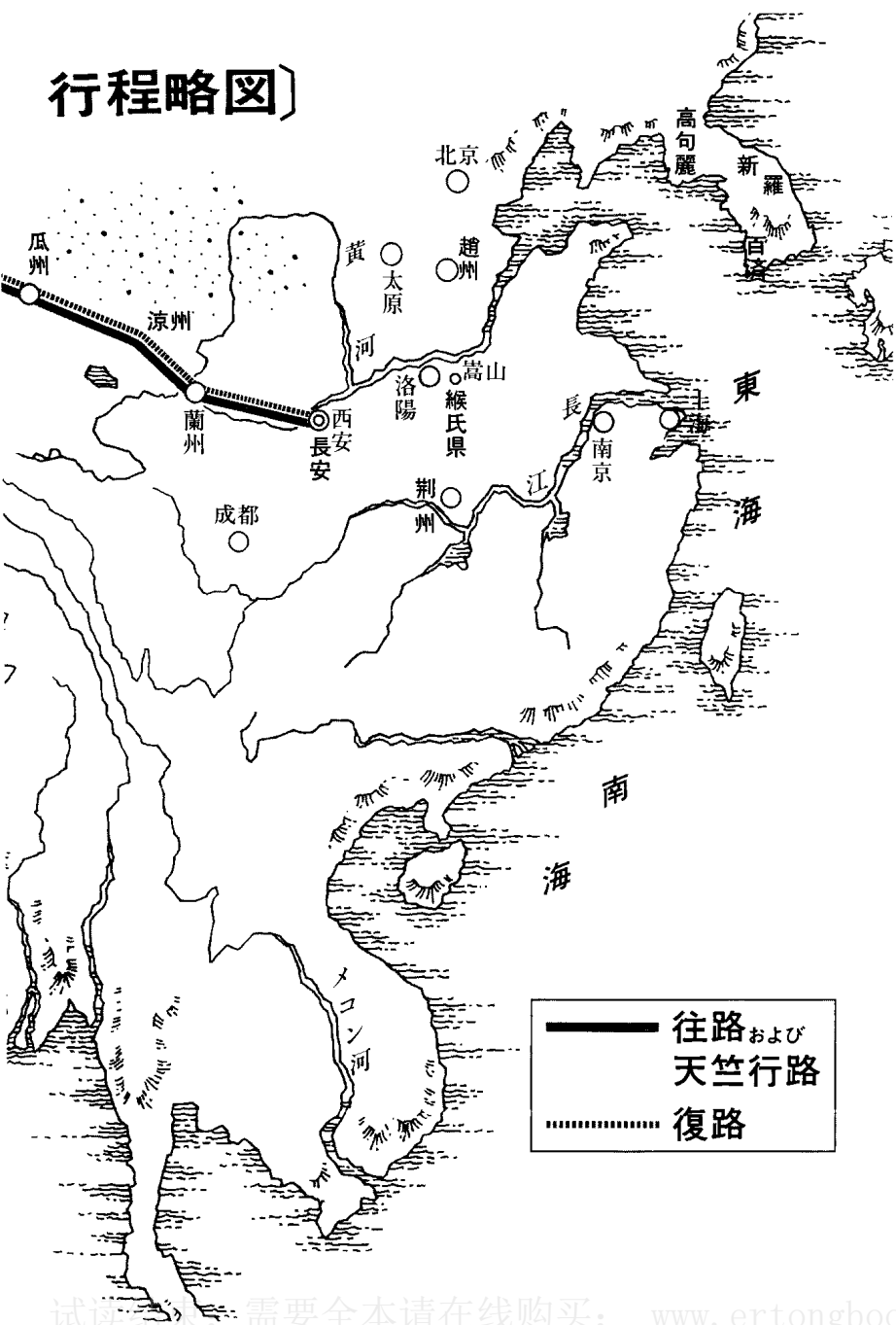
検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、本社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の内容の一部または全部を無断で複製、複製、転載することを禁じます。

目次 (上卷)

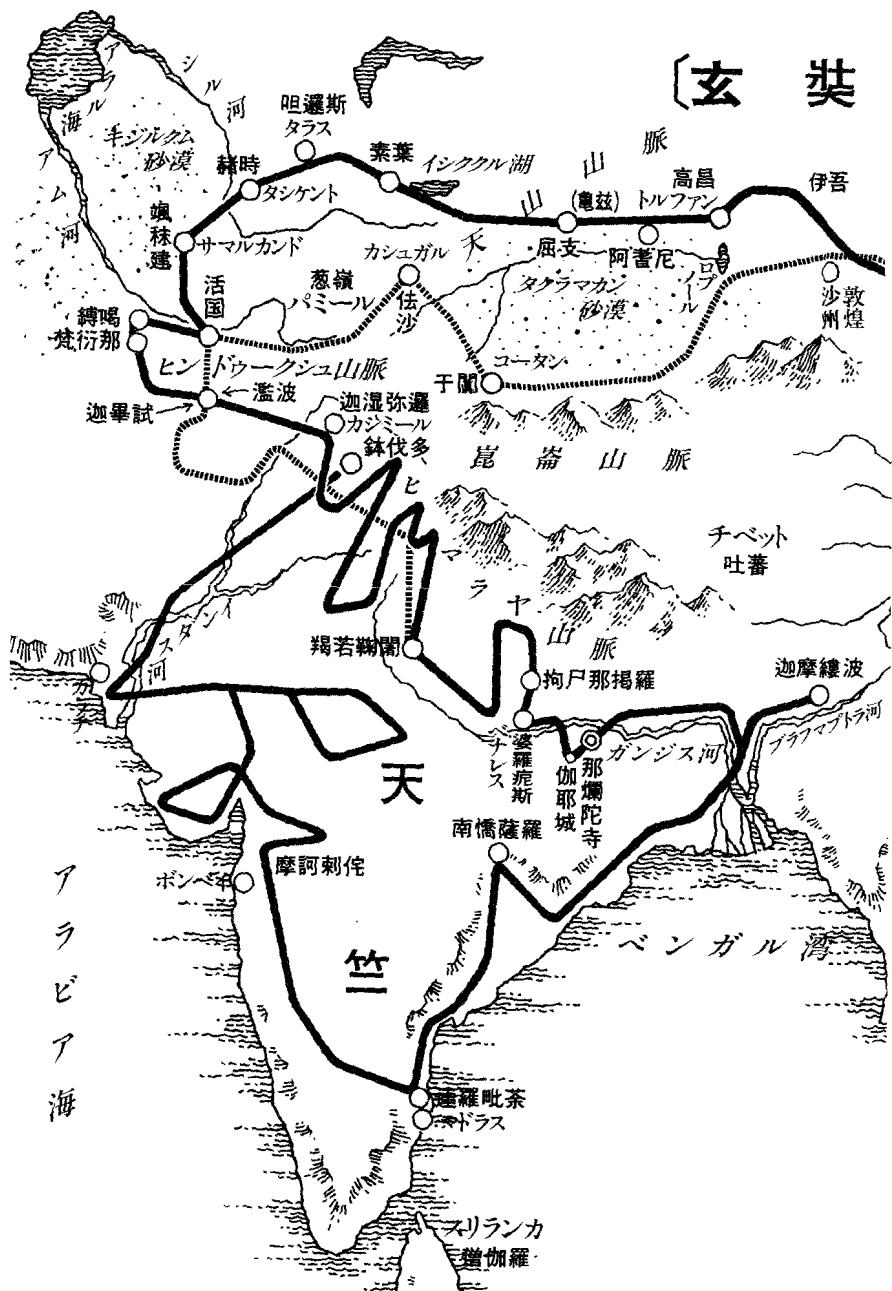
難	壯	玄	疾	崩	出	遠	煬	陰	嵩	プ
関	途	武	風	壊	家	征	帝	謀	山	ロ
										ー
										グ
249	223	195	171	148	125	99	67	41	11	7

# 行程略図]



—— 往路および  
天竺行路  
..... 復路

# 〔玄奘〕



地図

さがら常廣

西域伝——大唐三藏物語 上卷





## プロローグ

一人の高僧が、夢を見た。

彼は、死の床に就いていた。二十余年にわたって彼を苦しめていた風病が、このところとみにひどくなってきたのである。いまでいうリユーマチスである。発作が起るたびに、死ぬ苦しみを味わうのだ。彼は、すでに百歳を越えていた。

——もう死ぬ時期かも知れぬ……。

彼は、食を断って死を迎えることにした。床についてから五日目を迎えようとしていた。

不思議な夢であった——。

三人の天人が現われたのだ。一人は、黄金色、二人目は瑠璃色、そして最後の一人は白銀色の衣服を身につけていた。三人とも姿態は美しく、衣服は軽やかで、輝いていた。

黄金色の天人が、彼に近づいてきた。

「そなたは、いま自らの身を棄てようとしているが、その病苦は、過去の罪業のものである。世を厭って死を選べば、永劫にその業は消えまい。いまはよく忍び、仏法を広め、罪を消さねばならぬ時であるぞよ——」

その声は、涼やかで、とてもこの世のものとは思えなかった。黄金色の天人は、瑠璃色の天人を指差した。

「そなたは知っておるか、こちらは、観世音菩薩であるぞ」

彼は、思わず頭をさげた。そうせずにはおれない神々しきを感じたのである。黄金色の天人は、白銀色の天人を示していった。

「こちらは、弥勒菩薩である——」

高僧は、またもや平伏し、礼拝して問うた。

「私めは、いつも御身のもとに生まれ代るように願っております。この願いは達せられましようや？」

弥勒菩薩が、答える。

「そなたが正法を広く伝えたならば、後世にはその願いが達せられるであろう」

「ははあ——」

彼は、身の縮むような緊迫感に捉われた。それは、かつて経験したことのない種類のものだった。

黄金色の天人が、名乗りをあげた。

「われは、曼殊室利菩薩である……」

曼殊室利菩薩は、文殊菩薩を意味する梵語である。文殊は、智慧を司る菩薩として知られている。文殊菩薩は、言葉を継いだ。

「……そなたが自ら身を棄てようとしているのを見て、われら三人でここに参った」

「——」

老僧は、ただただ無言で頭をさげた。

「そなたは、われらが言葉に従い、『瑜伽論』その他の正法を、まだその教えを聞かぬ国々にあまねく広められよ。近くチーナ国からそなたについて学ぶために、一人の僧が参る。そなたは、この者を待ち、教えを垂れなければならぬ——」

なんともいえないぬ精神の昂りが、老僧の心のなかに起つ

た。それは、心の芯を突き動かすような激しい力だった。

「はっ、謹んでお教えに従いまする——」

彼が深々と頭をさげた時、頭上で声があった。

「ゆめゆめ疑うこと勿れ……」

はっと見上げたが、菩薩たちの姿は、かき消すごとくに消えていた。

その時、夢が破れて、眼が覚めた。

「不思議な夢であったな」

彼は、床の上に身を起した。断食に入って五日目になっているのに、なんとも爽やかな気分であった。風病の痛みも、心持ち薄らいでいるようである。

「ありがたいことだ」

老僧は、独りごちた。彼の名を、シーラバドラという。漢字で書くと、戒賢法師である。世界に冠たる天竺・ナランダー（那爛陀）寺の正法蔵——この寺第一の大徳であった。

——東の国チーナから、いったいどんな僧が来るというのか？

夢のなかの文殊菩薩の言葉からは、チーナに仏法を広め得る男のようであった。彼は、チーナに行ったことはない。だが、その国の実情は知っていた。いまは、唐と

呼ばれており、大乘仏教が行われている。

——楽しみなことじゃ。さて、それまでは、しっかり生きねばならぬ。御仏のご加護を信じてな。

戒賢は、枕元の鈴をとって振った。入って来た従僧に、彼はいった。

「すまぬが、粥かゆを持って来てくれぬか」

「正法蔵さま、粥かゆをでございますか？」

師の坊ぼうの入寂にゅうじやくのための断食を知っている従僧が、驚いて問い返した。

「そうじゃ。死ぬのはやめじゃ。あと数年、生きておらねばならぬ。これは、御仏との約定やくじようでな」

老僧は、一人で含み笑いしていた。訳はわからぬが、師の坊ぼうの気が変わったことは間違いない。従僧の顔に歓喜の表情が走った。

「はい、只今用意いたします……」

慌しく立ち去る従僧を見て、戒賢はまた独りごちた。

——どんな男が来るのか、とくと見極めてくれよう。チーナからこのナーランダーに来るには、三年はかかるじゃろうが……。

ナーランダー寺は、マガダ国の旧都ラージャグリハ

(王舎城)の北郊、尼連禪河にれんぜんがの東岸にあり、仏陀が大覺さとりを開いたブツダガヤの東北約百キロにある。

当時、ナーランダー寺は、他に比肩するもののない仏法研究の殿堂であり、世界一の權威ある大学であった。

大乘仏教を中心に諸派の仏教教義が研究され、古典『ヴェーダ』をはじめ、因明いんみょう(論理)、声明しょうみょう(音韻)はもとより医学、数学にわたる諸学の權威者が集まっていた。数千の学生は、毎日百余カ所で開催される講座で、それぞれの研究に寸暇を惜しんで没頭していた。学生は、単に天空からだけに留まらず、諸国から集まった秀才が、この最高学府に学んでいた。一度境内に入れば、仏法の深い教義を論ずる者にあらざれば、誰からも相手にされないほどの好学の氣風がみなぎっていた。

寺の敷地は、もとアームラ長者の私有地であったのを、五百人の商人が買いとって釈尊に寄進し、釈尊もこの地で三ヶ月間説法した、と伝えられている。仏滅後、マガダ国王シャクラーディチャがこの地に寺を建て、その後、歴代の国王が増築して、現在の規模の広大なものになった。

多くの伽藍がらんの回りを高い煉瓦塀べいが囲み、華麗な建物の間には、緑水がゆるやかに流れ、蓮花の咲き誇る大小の

池のほとりには、カナカ樹が繁り、孔雀が舞っている。その傍には、マンゴーの樹林が涼しげな木蔭をつくっていた。

諸院僧房は、四階建てで、すべて丹青で彩色され、いたるところに彫刻が施されていた。高い塔は、仏典の保管場所を兼ねた、図書館の役目をしている。

寺の外側にも、いくつかの見事な建物が並んでいた。東方には、高さ八十余尺の銅の仏像があり、六層の重閣で被っている。また、西には、カニヤークブジャの戒日王が、銅のヴィハハラ（精舎）を建築していた。

マガダの支配者である戒日王は、近隣百余邑の収入をすべてこの寺の維持に当てており、毎日二百戸から米、バター、牛乳などの寄進があり、学生たちは衣食の心配なく研究に没頭することが可能であった。

「旨い。久しぶりの粥は旨いのう……」  
正法蔵戒賢法師は、従僧が運んできた粥を啜りながらいった。

「正法蔵さま、痛みませぬか？」

従僧が、心配気に訊く。

「大事な、大事な。風病はどこかへ飛んでいったようじゃわ……」

戒賢は、腕に残った最後の粥を啜り終った。

「見違えるほどお元気になれましたわい——」

驚く従僧に、ちらっと微笑を投げかけて、戒賢が立ち上った。

「御仏にお礼を申してこようかのう」

東の空が白みかかっていた。

六二七年の秋八月のことである。

唐風にいうと、六二七年は、二代目皇帝太宗の貞観元年である。

その秋八月、一人の青年僧が、西の方、遙かなる天竺を目指して、いままさに都長安を旅立とうとしていた。

1

「ほんに、めでたいことよのう——」

祝いの赤飯を炊くため、糯米もちめをといでいた老婆が、手を休めていった。

「なんとといっても、四十を過ぎてからのお子の誕生じゃ。水鏡先生も、さぞお喜びであらうて」

隣で煮物をつくっていた中年の女が、相槌を打った。

「ところががのう、そう喜んでばかりはおれぬことがあるのじゃよ」

脇で野菜を洗っていたあばたの女が、気をもたせるように声をひそめた。

「どうしたというのじゃ？」

と、老婆。

「それがのう……」

どこかで、ウグイスが鳴いていた。のどかな陽の光が、外の本立ちに降り注いでいる。

「気をもたせず早くいうがよいわ」

中年の女が、せかせだが、あばたの女は落着いていた。ゆっくりと舌の先で唇に湿りをくれてから同じ台詞を口にした。

「それがのう……」

隋文帝の仁寿二年（六〇二年）の早い春が始まろうとしていた。ここ、陳堡谷ちんほこくにも、春は確実に訪れていた。村のあちこちの杏林あんざんは、いまが花の真つ盛りで、白と淡紅色の霽ももがかかったようにかすんで見えた。

陳堡谷は、古都洛陽の東南三十キロの緱氏県こうしにある。

現在の河南省偃師えんしの南郊で、昔の滑国は、この辺りにあ

つたといわれている。北には洛水が走り、洛口で中国大陸第二の大河黄河に流れ込んでいる。

東には、名山嵩山が聳えている。

標高は約千五百メートルで、あまり高くはないが、古くから中国五岳の第一に挙げられている。古来より別名が多く、外方、嵩高、中嶽、太室、崇高、半石山などとも呼ばれ、神聖な山として人々の信仰を集めていた。

地理的には、秦嶺山系の東に位置し、その西側に洛水、伊水が流れ、洛陽盆地を形づくっていた。

主峰をなす太室山は三十六峰、それに連なる少室山は二十四峰あるが、前者は高く、後者は険しいのが特徴である。少室山は、高さ八百メートル、周囲約五十キロで李室とも呼ばれている。その南面に奇峰が聳え立っている。それと対照的に北面は、山頂が平かで四天门があり、一見自然の城塞のように見えるところから、御塞山とも呼ばれていた。

陳堡谷から見ると、この少室山が美しい山容を覗かせている。

陳家は、陳堡谷近郊切つての名家であつた。

河南の潁川を故地としており、祖は、後漢の陳寔で

ある。

——陳寔。

字は仲弓。文範先生と号した。太丘県長などを務めた一地方官に過ぎないが、その際立つた徳政で歴史に名を留めている。

太丘の県長をしていた陳寔の家にある夜、泥棒が忍び込んで梁の上に隠れていた。陳寔はこれを発見したが、別に騒ぎ立てもせず、子弟を集め、こういった。

「人の性は元来、善良なものであるが、なにかの拍子に誤つて悪人となることがある。梁上の君子も、まさにそういつた例であらう」

ちょうどその年は、飢饉が起り、民衆が生活に苦しんでいる時であつた。陳寔の話聞いていた梁上の泥棒は大いに感動し、飛び降りて陳寔の前に平伏した。

「先生、どうか私めを罰しておくんなさい——」

陳寔は、彼を諒々と諭したあと、絹二匹を与えて帰したのである。それ以来、太丘県には、泥棒がいなくなつたという。

「梁上の君子」は、以後泥棒を指す別称となつた。

陳寔には、元方と季方という二人の秀れた息子がいた。二人のそれぞれの子どもたちが、どちらの父の方が優秀

かという口喧嘩となり、祖父の彼に判定を求めてきた。彼はこう答えた。

——元方は兄為り難く、季方は弟為り難し。

才能、人格に優劣をつけ難い時、この陳寔の「兄為り難く、弟為り難し」という言葉が、広く使われるようになった。

彼は、単なるエピソード・メーカーではなく、実生活でも硬骨漢として知られた。

宦官の横行、暴挙を厳しく批判したため、逆に宦官から弾劾された。桓帝は、陳寔ら二百余人を投獄したが、取り調べの段階で、次々と宦官の悪事が暴露されることになり、慌てた宦官たちは、弾劾を取り下げた。

当然、投獄されていた人々は釈放されたが、陳寔だけは禁が解けたあとも、出仕することを潔しとせず、さつさと隠居してしまつた剛直な人物である。

この陳寔を祖とする陳姓は少なくないが、陳堡谷の陳家も、その一つであつた。曾々祖父の陳湛は、北魏の清河太守、曾祖父の陳欽は、北魏の征東將軍、南陽郡の開国公となつた。祖父の陳康は、北齊の国学博士、礼部侍郎を歴任している。当主の陳惠も隋の江陵県令を務めたが、宮仕えは性に合わなかつたとみえて、早くから官途

につくことを諦め、郷里の陳堡谷に引き籠つたのである。

温和で、名利を求めず、水鏡と号し、悠々自適の生活を送っていた。人格高潔の上、学問も深く、仏教に深く帰依し、まずは申し分のない人柄で、土地の人々からは、「水鏡先生」と敬愛されていた。

妻の宋氏との間には三人の男の子と一人の女の子があつた。

——もう子どもは授かるまい。

と、思っていたところ、四十歳を過ぎてから、四男が誕生したのである。

「……それがのう。ここだけの話じゃが、奥さまの産後の肥立ちがあまりよろしゅうない」

あばたの女が声を細めていった。

「なんと！」

「お子は、未熟児であつたと……」

あばたの女が、さらに囁くようにいった。

「それは、それは——」

「躰もちつこいし、産声が、いかにも頼りなげであつたというぞえ」

「育ちますのか？」



「それが心配じゃ。水鏡先生も、奥さまのお躰ともどもそのことを案じていなさる」

「そういえば、うちの連れ合いが、妙なことを話しておつたげな」

中年の女が、いった。

「妙なこと？」

「嵩山へ到る山道で、一昨日一人の道士に会つたげな……」

女が、語り始めた。なかなか話上手な女である。

「異様な風体で、肌の色が黒かったそうな。その道士がこう訊いたげな。

——この近くで、一兩日中に生まれる赤子はおらんかと……」

「ほう、それで？」

「連れ合いは、なにげなく陳堡谷の水鏡先生の家でおめでたが間もなくじゃと……」

「いったのかえ？」

と、老婆。

「そうじゃ。そうすると、その道士は、なにやら意味ありげにニヤリと笑つたそうな」

「で、連れ合いは、どういう訳か、と訊いたげな。道士は、

——男の子なら、われらに呪われた子になろう。

と、いったそうじゃ」

「どういう意味じゃ？」

「わからぬ……。で、この村で生まれた男の赤子は、こ

の家の四男坊だけじゃ」

「その道に会つたというのは、どこじゃ？」

老婆が、訊いた。

「五乳峰から少林寺にかかる道じゃったと」

少林寺は、嵩山に連なる少室山の北、五乳峰の麓にある名刹で、「嵩山少林寺」の名で知られている。

「なるほど、少林寺かえ。あの寺は、昔天竺から来られた達磨大師さまが開かれたものじゃ」

物識り顔で、老婆がいった。

「天竺には、肌の黒い人間がいると聞くぞ。その道士も、案外天竺から来たのかも知れぬのう」

あばたの女は小首を傾げた。

「それにしても、なにやら気味の悪い話よのう」

三人の女が、顔を見合せ、首をすくめた。なんとなく冷たい風が、首筋から背筋に走るのを感じたためだった。